

の六十二氏が署名した決議をなし新帝院との絶縁を聲明、文部當局不信任の巨弾を放つと同時に美術界空前の大衆運動を起した、一方情報に接した文部當局は極度に狼狽して添田政務次官は午後四時半文相官邸に赤間専門學務局長、和田東京美術學校長を招き協議したが、何等まとまらず、單に來る十日開催豫定の新帝院會員總會を延期して切り崩し策に出ることになった、絶縁を聲明した舊帝展洋畫無鑑査の諸氏は今後新團體を形成、帝展に對し在野團體の地位を確保するものと見られる、なほ決議文は印刷して文部省はじめ美術關係各方面に配布するが、これによつて滿洲旅行中の熊岡美彦、高間惣七氏等の東光會の同人を除く舊帝展審査、無鑑査、特選級全部が不出品同盟を結んだこととなる

決議 今度の帝展改組は些々たる世俗の風評に動かされ、既に政府が認めたる一國の最高美術機關に何等の諮るところもなく、一朝にして美術振興に關する實績と歴史とを蹂躪した暴擧と思ひます、故に私達はかゝる信頼を置く能はざる組織の下に開催される展覽會には、今後一切私達の制作を出す品しないことに致します

〔下略〕

(昭和十年六月四日『東京日日新聞』)

不出品同盟の成立により、和田英作は非常に困難な立場に立たされることになった。彼は各方面からの攻撃の矢面に立ちながら、反対派の慰撫に奔走した。

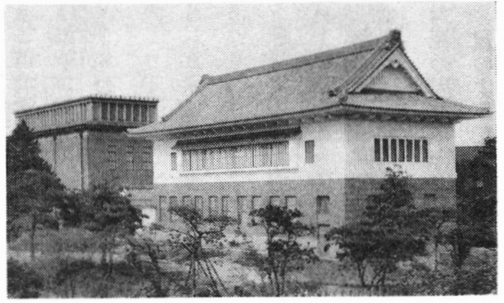
嵐のような騒動の中で六月十四日、本校會議室に於いて帝國美術

院の總會が開かれ、次いで二十九日に学士院で再び總會が開かれ、さらに種々の協議が行われた結果、帝展の無鑑査資格者は帝國美術院會員、同参与、旧帝展に於ける受賞者、帝國美術院が指定した者の四種を含むものとし、展覽會は隔年交替制度(日本画と洋画は隔年にあるいは春と秋に分けて開催する。彫刻は和風彫刻と洋風彫刻に分けて同じく交替して開催する。工芸は毎年開催する。)によつて開くこととした。その第一回展は翌十一年春に開かれ、日本画、和風彫刻、工芸のみが出陳された。日本美術院の主要作家や川端龍子も出品したため、確かに帝展の面目は一新したが、同年六月の平生(飢三郎)文相による再改革により、展覽會が文部省主催に変更し、再び騒動が起つたため、改組帝展はこの一回限りで廃止され、松田文相、正木直彦、和田英作らの「挙国一致」の体制樹立構想は崩れ去った。

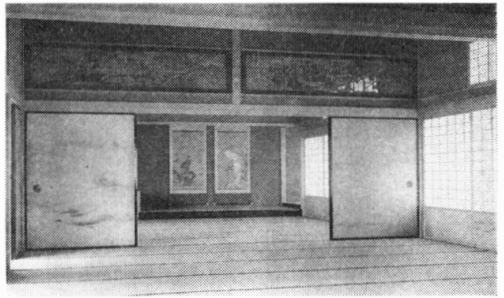
なお、松田改組は従来帝展に對抗して独自の立場を貫いて來た在野諸団体の内部に深刻な対立を引き起こし、脱退や追放などの事件が発生した。

⑨ 正木記念館設立と正木直彦寿像の寄贈

昭和十年十一月一日、前校長正木直彦を記念して建てられた正木記念館の開館式が挙行された。このことは校友会会報の記事(699頁参照)のとおりであるが、そのなかに記されている正木直彦の寿像は予定通り沼田一雅の手によって完成し、同十三年十月二十六日、正木の七十七歳の誕生日に除幕式と沼田一雅から正木へ、正木から正木記念館建設會へ、同會から國家への贈呈式が行われた。同月、



正木記念館（記念絵はがきより）



正木記念館階上日本間（同）



沼田一雅作 正木直彦陶像（同）

正木記念館建設会は『正木記念館建設報告』を発行。そのなかに左記の沼田一雅の寿像贈呈の辞が収録されている。

贈呈之辭

明治三十七年に、私は正木先生から、先生が滞歐中親しく見て來られた、佛國アール港の市長の像がオーギスト・ロダンの作で、陶製であつたが、非常に宜く出来てゐた。近世の日本には燒物の彫刻の良いものがないが、誰れか研究する人があると宜いとの御話を聞いたのでありますが、私は元來燒物に興味を持ち、彫刻をやつてゐる者でしたから大に感動して早速研究して見ませうと申上げたら、外國へ行つて研究しなければいかんとの事で、二ヶ月も経つか經たぬ中に、急に農商務省練習生として、渡佛する

事となつたのであります。私は佛國に渡り、セーブルの國立陶磁製作所につでを求めて入所して、四十年の春迄研究致し、大體の要領を會得したのであります。其後漸次研究して参りますと、尙意に満たぬものがあつたので、再びセーブルに赴いて研究して歸つたのであります。其後正木先生の御推薦で、秩父宮殿下の表町御殿の玄關に置く、三尺位の獅子を一對謹作しましてから、製作にも燒成にも或る確信を得たのであります。そこで正木先生に御報告旁々御恩返しにとも思ひ、先生の壽像を作つて差し上げ度いと考へ、幸にも先生の御許しをも得ましたので、石膏の原型を作つたのであります。丁度其頃京都の國立陶磁試験所の方へ關係する事となりましたので、原型を持つて京都へ引越をいたしました。所が幸ひにも試験所長平野耕輔先生が、正木先生の

古い御知己であり、又私の壽像製作の話聞かれて、大に同情と賛成をせられまして、試験所で試験的に等身の陶像を焼いて見やうと云ふ事になり、約三ヶ年を経てやうやく出来た様の大第であります。私と致しましては、釉薬の色や其他にまだく研究しなければならぬ所があり、又彫刻といたしましては、尙意に満たぬものがあつて、先生の御尊容を表し得なかつたのであります。どうか御受納を得ますならば誠に幸に存する次第であります。

⑩ 依囑製作六曲屏風

昭和十年四月、依囑製作の東京十二景六曲屏風が完成し、四月十日歌舞伎座に於ける東京市主催満洲国皇帝奉迎式に於いて皇帝に献上された。各紙がこれを大きく採り上げているが、四月十日の『時事新報』は次のように報じている。

市献上の屏風完成・あす皇帝陛下へ

歌舞伎御見物の折御座所の後に配す

美校諸教授が精根盡した東京十二景 見事な出来栄

御來訪の御思出のよすがにもと東京市が満洲国皇帝陛下に献上する東京十二景地板嵌六曲屏風一雙は、美術學校の諸教授が精根をつくしてその製作を急いでゐたが本九日見事に出来上り、明日皇帝陛下が歌舞伎御見物の折御座所の後に配して一層御感興を添へることになつた、この屏風は桐、桑、蒔繪、鑄金、鍛金、彫金等あらゆる美術工藝の粹を集めて合作されたもので、高さ六尺

幅二尺、木目もはつきりした桐の素地に長さ一尺二寸五分、幅一尺一寸五分の東京名所十二景を誠に清楚に織り込み、この桐地下方の蒔繪にはかすかに東京市のマークを浮かしてあると云ふ擬り方で、裏はこの表の清楚さに比し布目に朱塗寶相華の高蒔繪を配してあると云ふ大陸味たつぶりのものである、この構圖は森田〔武〕助教授が一切當り、木工は帝展でも特選を得てゐる淺草橋の稻木春千里氏が製作したものであるが十二景は

日本橋（深瀬嘉臣助教授）赤坂離宮（海野清教授）上野動物園（津田信夫教授）二重橋（松田權六助教授）楠公銅像（丸山不忘講師）湯島聖堂（六角紫水教授）明治神宮（磯矢阿伎良講師）議事堂（内藤春治助教授）東京驛（山崎覺太郎助教授）靖國神社（清水龜藏教授）神宮繪畫館（石田英一教授）永代橋（高村豊周教授）

がそれ／＼擔當して制作に當つたものである。

⑪ 杉田禾堂と大阪府産業工芸博覧会

昭和十年六月八日から二十八日まで、大阪府立貿易館で大阪府産業工芸博覧会が開催された。「工芸品の工業化、工業品の工芸化」をスローガンとするこの初めての博覧会には、大阪府商工技師にして昭和七年六月同府立工業奨励館工芸産業奨励部の初代部長となつた杉田禾堂（精二）が大きな役割を果たした。禾堂は明治四十五年に鑄造科を卒業し、大正八年に講師に就任（鑄造実習担当）。金工研究会および无型の中心人物で、日本工芸美術会の創立や、帝展第四部創設にも重要な役割を果たした。昭和二年、初の帝展第四部の